

留学生センターホームステイプログラムの 現状とその意義

藤井 桂子

【キーワード】 留学生、ホームステイ、ホストファミリー、相互交流、
日本人との交流

1. はじめに

本学の留学生センターで留学生を対象としたホームステイのプログラムを始めて、3年が経過した。第1回目の2003年8月から第9回目の2006年6月までの間に、189名の留学生がこのプログラムに参加している。

ここでは、これまで実施したプログラムの状況を報告するとともに、このプログラムを通じて、留学生に対してどんなことを提供できたのかその意義を検討したい。

2. 本学留学生センターのホームステイプログラムの概略

2-1. ホームステイプログラムの開始

海外から日本にやってきた留学生にとって、日本の文化、日本人、そして日本を知る上で、わずかの時間でも日本人の家庭生活に触れることの意味は大きいと思われる。渡日してからの日が浅い留学生にとっては、ホームステイの経験は、見城(1997)で述べられているように、日本社会に対する認知を深め、留学生の異文化適応能力を高める意味合いでも、その一助となることが期待できる。さらに、ホストファミリーと知り合い、日本での生活、日本でのネットワークを広げるきっかけにもなりうる。

実際、留学生から日本の家庭を見てみたいという声も聞く。しかし、日本に住んでいるからといって、その機会がすぐに訪れるとは限らない。以前から、ホームステイについて問い合わせってくる留学生には、夏休み等の長期休暇中に全国各地で開催されるホームステイプログラム(注1)や、横浜市国際学生会館主催の

ホームビジット等を紹介していたものの、申し込みまでに至るのはごく積極的な留学生や経済的に余裕のある留学生に限られていた。そこで、留学生に対する支援の一環として、留学生センターでも日本の家庭を体験できる機会を提供したいと考えていたところ、多言語を家族で学ぶという活動を行なっているヒップファミリークラブという団体（注2）の横浜地域グループの協力が得られることになった。

先方のコーディネーターとの話し合いの後、2003年8月に第1回のホームステイ（1泊2日）を試験的に行うことになった。留学生との連絡のとりやすさ、フィードバックの得られやすさを考え、著者が担当する日本語授業の受講者から希望者を募り、留学生11名を送り出した。幸い、留学生からの反応もたいへんよく、ホームステイ以降もつきあいが続いているという報告も数件あった。第2回目をその年の11月に行い、翌年からはホームページ等でも募集を行い（注3）全学の留学生を対象に、6月、11月、3月と、年3回ホームステイプログラムを実施し、現在に至っている。

年3回のうち11月のホームステイでは、受け入れ団体の富士市周辺のメンバーの協力も受け、数名は富士市近辺でのホームステイに送り出している。春休み中の3月は、2泊3日のホームステイを行っている。

2-2. ホームステイプログラムの実施状況

これまで行ったホームステイの実施時期、場所、期間、参加留学生数は以下のとおりである。

回数	実施時期	場所	期間	参加留学生数。 ()は家族での参加数
1	2003年8月初旬の週末	横浜市周辺	1泊2日	11
2	2003年11月下旬の週末	横浜市周辺	1泊2日	20 (2組)
3	2004年6月下旬の週末	横浜市周辺	1泊2日	30 (2組)
4	2004年12月上旬の週末	横浜、富士市周辺	1泊2日	30 (1組)
5	2005年3月上旬の週末	横浜市周辺	2泊3日	12
6	2005年6月上旬の週末	横浜市周辺	1泊2日	23
7	2005年11月下旬の週末	横浜、富士市周辺	1泊2日	25 (3組)

8	2006年3月上旬の週末	横浜市周辺	2泊3日	12 (4組)
9	2006年6月上旬の週末	横浜市周辺	1泊2日	24 (1組)
個別	2005年8月、12月	横浜市周辺	1泊2日	3
合計				189

参加者の人数については、当初は人数枠を決めて行っていたが、現在はスムーズに募集のプロセスが踏めるよう、30人を最大枠とし、はじめに留学生の希望者を募り、申し込み人数に応じて、受け入れの家庭をさがしてもらっている。自分の家族といっしょに参加したいという要望にも応えてもらい、子供といっしょにあるいは夫婦や一家でのホームステイとなる場合もある。募集の時期以外にも留学生のホームステイに応じてもらったケースも3件あり、表では「個別」として記した。なお複数回の参加が可能で、数字は延べの人数である。

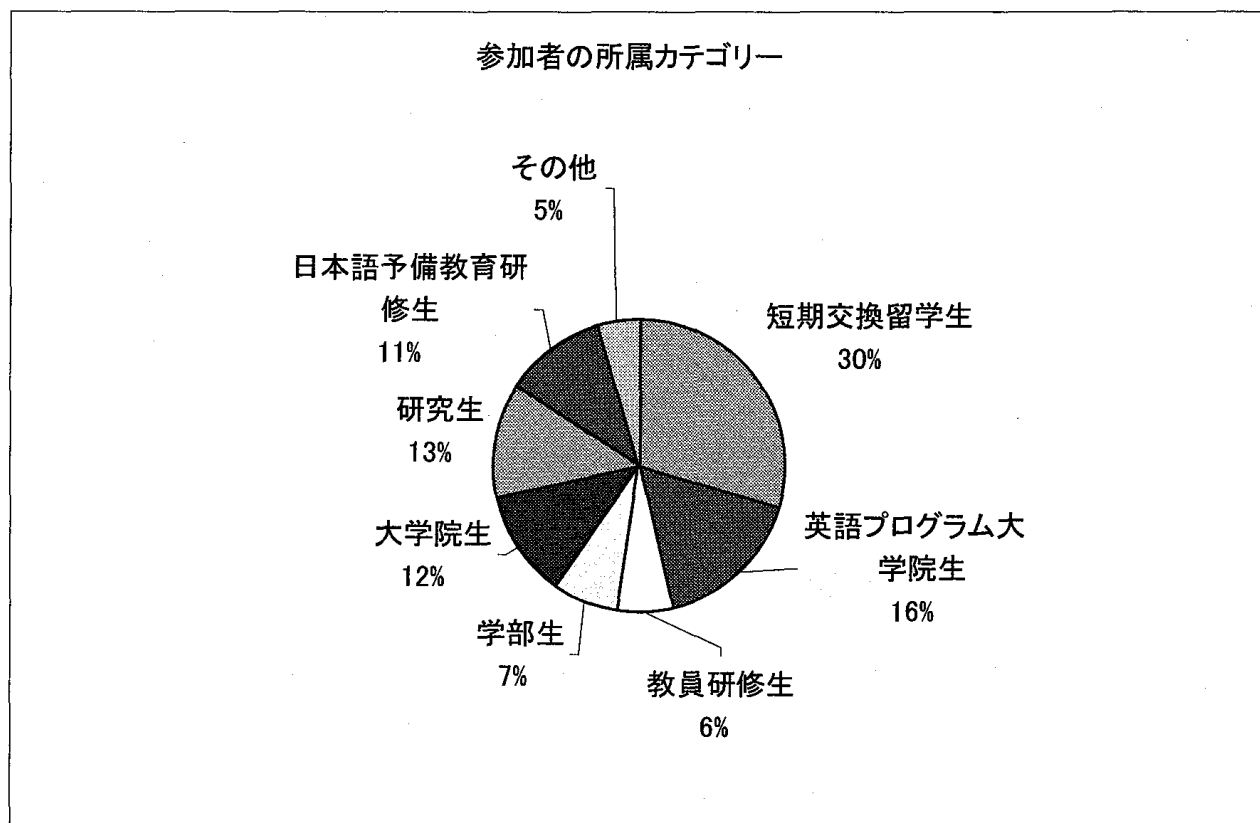
2-3. ホームステイ実施までの流れ

年度はじめに、受け入れ団体のコーディネータと話し合い、年間の予定を組み、各回については、事前の打ち合わせ、留学生募集、ホストファミリー募集、マッチング、オリエンテーション、対面式、ホームステイ実施、フィードバック（感想の提出）という手順で、このプログラムを行っている。オリエンテーションでは、ホストファミリー側のコーディネーター数人にも参加してもらい、受け入れ団体についての説明、ホームステイに関する諸注意を行い、また各ホストファミリーのプロフィールを留学生に手渡す。プロフィールに添付された家族の写真を手にした段階で、ホームステイへの期待が一気に高まる様子が見られる。連絡先が記してあるので、事前に連絡を取り合う参加者もいる。当日は、留学生センターに集合し、ホストファミリーと留学生との対面式を行った後、それぞれが各家庭に向かう。富士市周辺でのホームステイにおいては、留学生が各自あらかじめ決めておいた待ち合わせ場所に向かう。

ホストファミリーにはボランティアで留学生を受け入れてもらっているのもので、そのことも留学生によく理解してもらうよう指導している。留学生はその期間、旅行保険に加入し、その保険代（540円、当初は300円）を負担する。

2-4. 留学生参加者の内訳

次にホームステイプログラムに参加した留学生（注4）がどのようなカテゴリーに属する留学生であるかを見ておきたい。



このグラフを見てわかることは、留学期間やプログラムがあらかじめ定まっている特定のプログラムの留学生の参加率が高い点である。短期交換留学生の留学期間は半年または1年、英語プログラムの大学院生は、2年から3年、教員研修生は1年半、そしてその他に分類した研究員の滞在も期間が定まっている。これらの参加者の割合は合計で、57%にのぼる。一方、留学生数全体から見れば占める割合の高い一般の学部生、大学院生の比率はあまり高くない。特定のプログラムの留学生は、大学全体の留学生から見ると、占める割合は15%程度にしかすぎない点を考えると、このホームステイプログラムが、このカテゴリーに属する留学生に特によく利用されていることがわかる。

また、渡日後半年に満たない日本語予備教育研修生の参加が13%、半年または1年未満の短期交換留学生が30%、通常在籍期間が1年である研究生の参加が11%という数字にも現れているように、日本に来てからの期間が短い留学生

の参加が多い。渡日の時期を全員について調べていないので、正確な割合を示すことはできないが、参加者の顔ぶれから判断すると、渡日後半年未満の参加者が7割程度はいると見られる。日本での滞在がまだ短く、日本での生活経験も浅い時期に、ホームステイの体験を希望する留学生が多いといえることができる。

一般の学部留学生、大学院生の場合、入学前に日本での生活の経験を十分積んでいるケースも多い。民間のアパートに住み、日常的にアルバイトを行う中で、日本の生活を十分実感しているも言える。また、学業とアルバイトに精一杯で、時間的余裕があるとは限らない。一方、先にあげた、特定のプログラムの留学生の大多数は、生活に困らないだけの奨学金をもらい、大学の寮に住むことになるので、特に生活のためにアルバイトをする必要もなく、日本に来て日本でも生活しているという実感が少ないと言える。時間的にも余裕がある。こうした違いが、ホームステイプログラムへの参加、不参加に反映されているものと考えられる。

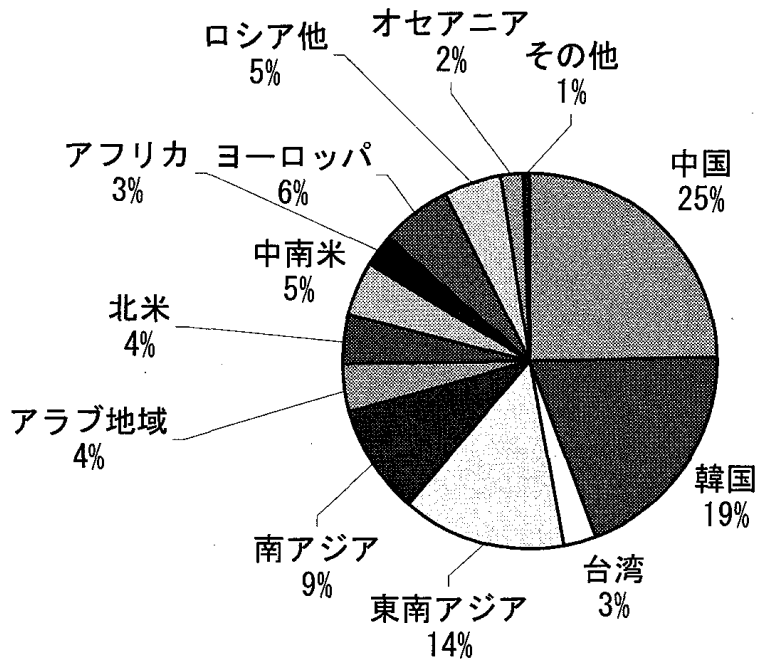
ただ、学部生、大学院生の中には、卒業・修了のめどがたったのち、日本の家庭に行ったこともないので、と言って申し込みに来たものも数名いる。状況によっては参加したいと考える留学生はほかにもいるものと思われる。

ここで見たように大学全体の留学生から見ると滞日期間が比較的短い留学生の参加が多いのだが、受け入れ団体側からは、他にホームステイを引き受けている短期滞在の技術研修員などに比べると、本学の留学生は滞在期間が長くホームステイ後も交流が続けられるということで、本学の留学生受け入れを希望する家庭は多いという話を聞いている（注5）。

2-5. 参加留学生の出身地域

ホームステイプログラム参加者の出身地域の構成は以下の円グラフの示すとおりである。参加者の多くが所属する特定のプログラムにおいては、出身地域がバラエティに富むが、そのことを反映した結果となっている。本学留学生全体の地域構成比（中国 45%、韓国 16%、台湾 3%、東南アジア 14%、南アジア 4%、アラブ地域 2%、北米南米 5%、アフリカ 2%、ヨーロッパ 3%、ロシア他 [ロシア連邦およびNIS 諸国] 3%、オセアニア 1%、その他 2% : 2005.5 現在）に比べ、中国出身者の割合が少ない点、アジア以外の地域の割合が高くなっている点が特徴である。

参加者の出身地域



2-6. ホストファミリーの家族構成

ホストファミリーの家族構成を見ると以下のようになっている。夫婦と子で構成される家族 (3世代の家族を含む) が97%を占める。このうち、受入団体のメンバーが30代の家族が50.3%、40代が32.0%、10代が5.2%、20代が2.6%となっている。小学生以下の子供がいる家庭の割合も高い。子供を持つ親は、本人の関心だけではなく子供に対する教育的な観点から多言語を学ぶこの団体の活動に参加し、また留学生のホームステイを引き受けるこのプログラムにも参加していると思われる。あるホストファミリーは、子供には国という垣根を意識しないような人間に育ててほしいので、この活動に参加していると述べている。まだ手がかかる小さな子供をかかえている家庭であっても、留学生を迎え入れ、交流を子供とともに積極的に楽しもうとしていることが窺える。こうした若い家族の家庭では、手のかかる子供のいる日常の日々であるがため、留学生にとってもお客さん扱いされるというより、むしろありのままの日常生活の中に飛び込むようなホームステイが実現されやすい面もあるのではないかと推測される。

3. 留学生がホームステイに期待していること

ホストファミリーとのマッチングの参考にするため、申込書に「ホストファミリーといっしょにどんなことをしたいか」を記述する欄を設けている。留学生がそこに記述した内容から、ホームステイに留学生が期待する事柄を取り出し7つに分類をした。以下はそれらをリストアップしたものである。項目のあとの数字は、その項目が記述された件数である。数が多いものから順に並べた。

1. いっしょに出かけること 60
観光スポット等に出かける20、富士山6、旅行5、子供と遊べる場所4、ホームステイ先地域4、公園3、外出2、温泉2、自然を味わえる場所2、写真をとりに2、博物館1、お寺1、教会1、お祭り1、キャンプ1、動物園1、野球の試合1、映画1
2. 料理に関わること 56
いっしょに料理を作りたい19、日本料理を教わりたい18、日本料理を食べたい12、自国の料理をたべてもらいたい7
3. 日本の文化に触れる40、文化交流14 計54
日本文化を体験したい21（ゲーム5、歌5、折り紙1、居酒屋1、ダンス1、映画1、大和魂を理解したい1）、伝統文化に触れたい18（着物4、茶道3、儀式を知りたい2、歌舞伎1）、それぞれの国の文化を紹介し合いたい14
4. 交流 44
話したい24（社会問題について1、子供の教育について1）、家族と友達になりたい／仲良くなりたい6、子供と遊びたい4、スポーツがしたい4（野球1、卓球1）日本人と触れ合いたい2、テレビをみたい2、老夫婦のところに泊まり手伝いたい1、家事を手伝いたい1、農業をしたい1、いっしょに何かしたい1
5. 日本人の家庭生活に触れる 42
日本の家庭を体験したい24、日常生活、本当の日本人の生活を知りたい18
6. ことばの学習 12
日本語を話したい8、日本語を習いたい3、自国のことばを教えたい1、
7. どんなことでもいい14

表に分類した7項目のうち、「いっしょに出かけること」という項目に分類される記述が最も多く見られた。ホームステイは日本の家庭を訪れてもらうのが目的であると考え、出かけたという記述には首をかしげたくなる面もある。しかし、これらの記述の多くは、ホストファミリーを観光ガイド扱いしているわけではなく、ホストファミリーとの交流の手段として書かれていると見る方が妥当であろう。どこかに共にでかけるという発想は、初めて出会う人との過ごし方として、まず思い浮かぶことの一つには違いない。ホストファミリーが鎌倉に連れて行ってくれたとうれいそうに鎌倉での写真を見せてくれた留学生もいる。共通の体験がお互いの距離を縮めることは十分考えられる。外出がそのための場として機能するならば、家庭で時間を過ごすことにだけこだわる必要はないと考える。富士山の件数が高いのは、富士市周辺へのホームステイを前提にしたものである。

次いで多いのが日本料理を教わりたい、食べたいなど、「料理に関わること」である。いっしょに料理を作りたい、自国の料理を紹介したいなど、料理を通してのホストファミリーとの相互交流への期待も見られる。3番目は、「日本文化に触れたい」とするものであるが、この中には、日常的な生活文化を志向するものと、伝統的な日本文化を志向するものの両者が見られた。また相互交流的な意味合いでの文化紹介を期待する記述も含まれている。4項目目の「交流」は「話したい」という事柄の他、交流に関わる記述をここに分類したが、他の項目でも交流的要素を含むものも多いので、交流への期待を持つ記述はここに示した数よりも多いと言える。5項目目は「日常の家庭生活に触れる」に分類される事柄である。大学のキャンパスでもまた寮の生活でも見ることのできない日本人の家庭での生活を知ること、体験することがホームステイに期待されていることがわかる。6項目目は、「ことばの学習」に関するものだが、日本語の学習途上の参加者が多いにも関わらず、日本語の上達への期待を示す数字はあまり大きくない。自分の日本語の能力を心配する参加者もいないわけではないが、事前に相談を受けるケースから見ても、ごく少ない。

4. ホームステイについての留学生からのフィードバック

留学生からのフィードバックを得るため、留学生を送り出す当日の対面式で用紙を配布し、ホームステイ実施後に感想・コメントを提出するよう求めている。

3回目以降は、4つの質問（ホームステイでよかったことは何か、困難を感じたことは何か、日本の生活あるいは日本人に対して新しい発見があったか、その他）に応える形で記述してもらっている。以下は提出のあった83名分の記述から項目を取り出しまとめたものである。数字は記述件数である。

4-1. ホームステイでよかったことは何か

ホームステイでどんなことがよかったかについての記述を以下のように表にまとめた。項目名のあとの数字は記述件数を示す。件数が多い順に並べた。

1. 人との出会い・交流 62
子供との交流19、ホストファミリーのホスピタリティがすばらしいかった13、とてもいい家族だった12、家族の一員のように迎え入れてくれた9、新しい友人が得られた7、年代を超えた出会い3、パーティ1、たくさんの日本人とつきあえた1、
2. 日本文化の体験・学習 35
日本文化を体験できた25（お風呂4、布団4、着物3、歌舞伎2、踊り2、温泉2、折り紙2、音楽2、お茶2、和室1、書道1、アニメ1）、日本の文化や習慣について学べた10（育児法1、アジア的価値観の共有1）
3. 相互交流 35
いろいろ話したこと15、お互いの国の文化／言語の交流になった13（ことばを教え合った4、ダンスを教えた2、映画と服を見せた1）、自国の文化やことばに興味をもってくれた3、いっしょに遊んだ4（ゲーム2、趣味を分かちあった1）
4. 料理作ったこと、食べたこと 30
料理（日本料理）をいっしょに作ったこと12（手巻き寿司、日本風餃子、おにぎり、てんぷら、たこやき、のりまき、稲荷寿司、お好み焼き）、日本料理を食べたこと10（ちらし寿司、ゴーヤ、そば、手巻き寿司、刺身、温泉卵、スイカ割り、流しそうめん、聞いたこともない日本料理を食べたこと〔日本へ来て一番最高の経験〕）、自国の料理を作ったこと7、自分のためにベジタリアン料理をたくさん作ってくれたこと1、その他2
5. 日本人の家庭生活に触れる 25
日本人の普通の生活を体験できた／日本の本当の生活や習慣がわかった18、一日中日本人と過ごせた1、距離感を持たずに交流できた1、日本の女性のすごいところがわかった1、小学校の運動会を見学したがとても印象が深かった1、娘さんの誕生日にいっしょにケーキ

をつくり祝った1、ワールドカップのゲームをいっしょに見た1、飲み会に参加した1、
6. 出かけたこと 21
浅草3、鎌倉3、富士山3、金沢プラザ、博物館2、八景島2、横須賀、公園、自然がきれいなところ、その他、
7. すべて楽しかった 14
生涯で忘れられない思い出になった5、ほんとに思い出に残る日となった1、私の大学生活にとって貴重な経験だった。日本にきてから最も楽しい週末となった1
8. ことば（日本語）に関する体験 10
日本語の勉強になった8、日本語で話した2
9. ヒッポファミリークラブの活動（多言語によるメンバー同士の交流）がよかった 9
自国でもこの活動を展開してほしい1

この結果をみると、実際のホームステイを経験し、参加者によかったこととして最も心に残るものは、「人とのよき出会い」であることが窺える。回答者の75%がこのことに触れている。上の表に示したように、子供との交流を筆頭に、ホストファミリーのホスピタリティー、家族の一員のように感じさせてくれたことなどがよかったこととして記述されている。特に小さな子供のいる家庭では、子供との自然な触れ合いに心弾み、心通う思いを強くする留学生が多いようである。

2番目に多く書かれていたのは「日本文化の体験や学習（35件）」についてである。お風呂に入ったり、布団に寝たりという異文化体験が新鮮に感じられるようである。「相互交流」についても35件の記述があった。いろいろお互いの文化について話したり、ことばを教え合うことも楽しい経験となっているようである。ついで、「料理を作ったこと、食べたこと（30件）」「日本人の家庭生活に触れたこと（25件）」「出かけたこと（21件）」「すべてが楽しかった（14件）」「日本語に関する体験（10件）」「ヒッポファミリークラブの活動（9件）」と続く。これらの大部分は留学生がホームステイへの期待として記述していた内容と一致し、上の表に示されているようにこうした事柄を具体的に体験できたことは、ホームステイの大きな利点であるに違いない。しかし、それ以上に、ホストファミリーと心が触れ合うような関係を持てたことが、このプログラムの最大の利点であると見ることができる。「交流」という漠然とした概念で期待していた以上の親密な関係を、一泊ないし二泊という限られた時間の中でも築き得たことに驚

きと喜びを示す留学生も少なくない。大学生活の中では、大勢の学生のひとりにすぎない留学生だが、ホームステイ先では、一人の人間として好意と関心を持って迎え入れられ、自分の存在を再確認できる場ともなっていると考えられる。そして、家庭の温かさに触れることで、自然と心が開き、お互いの距離が急速に縮まるのではないだろうか。7番目のすべて楽しかったという項目に見られるいくつかのコメント（生涯で忘れられない思い出になった5、ほんとに思い出に残る日となった1、私の大学生活にとって貴重な経験だった。日本にきてから最も楽しい週末となった1）は、ホームステイが彼らに強い印象を残したことを示すものと言える。

このほか、その他の欄に、以下のような感想の記述もあった。

その他の感想
また参加したい6、ずっと友人でいたい2、このプログラムを新しい留学生にぜひ紹介したい1、来週も会う予定 1、こんど日本へ来たときは、また遊びに行く1、ホストファミリーに早くまた会いたい2、このプログラムが短過ぎるのが残念 2、日本語の勉強のため、こうしたものがもっとあってほしい1、帰国まで交流を続けたい1、自分が家族をもったら、ヒッポに入りたい1、ホームステイのあと、2回遊びに行った。今も交流が続いている1

このホームステイプログラムは、ホームステイと言っても週末に一泊ないし2泊するだけのものである。しかし、この表にも示されているように、その後の交流を望む声や実際交流が継続されているという報告をしばしば聞く。毎週のように訪問している、月に一回は泊まりにいく、冬休み3週間まるまる泊めてもらった、夏休みに富士山と一緒に登った、帰国の前日はホストファミリーとともに過ごす、帰国後も交流が続いている、母国から遊びに来た親を紹介した、といった内容のものである。プログラム後の交流は当事者まかせなので、どのくらい交流が続いているのかの実態は正確にはつかんでいない。しかし、このプログラムが留学生の日本での生活、あるいはネットワークの拡大にも貢献していることを、企画側としてはたいへんうれしい報告として受け止めている。

4-2. ホームステイで困難を感じたこと

次のホームステイで困難を感じたことについての記述を見たい。

特に問題となる困難はなかった 28
困難はなかった 20、語学力は不十分だったが問題なかった 8、
日本語力 7
あるとしたら日本語力不足 4、日本語をうまく話せなかった 2、日本語では腹を割って話せなかった 1、
その他 11
手伝いをさせてくれなかった 1、お風呂の栓を抜いて迷惑をかけた 1、外食ばかりだったので、家庭料理を味わいたかった 1、一人暮らしのうちだったので家族を体験したかった 1、床で寝たこと 1、親はことばを子供に習わせたかったようだが、子供はその気がなかったこと 1、習慣の違いに難しさを感じた 1、子供の遊びについていけなかった 1、もっと日本の文化について見せてもらいたかった 1、ホストの気遣いが有りがたいと同時に負担に感じた 1

困難はなかったとする記述が最も多かった。日本語力については、十分でなくても問題なかったとする者が 8 件、困難として感じる度合いが少ないがあるとするれば日本語とするものが 4 件、問題視している者は 3 件である。日本語だけでは十分コミュニケーションをとることが難しいと思われる参加者もすくなくないが、全体としては問題として感じている者は一部であることがわかる。

このプログラムの改善のために、当初からネガティブなコメントもできるだけ拾いたいと参加者に求めて来たが、上記にあるような問題点は見られるものこれまで大きな問題はあがってきていない。外食ばかりでなく家庭料理も食べたいというコメントなどは、受け入れ団体にも伝え善処してもらっている。もっと長い期間のホームステイであれば、さまざまな問題が生じるのであろうが、期間がごく限られているので、お互い無理を無理とも思わず過ごすこともできるのかもしれない。また、このホームステイプログラムはホストファミリーのご厚意なしには成り立たないものではあるが、留学生にホームステイを体験してもらうために実施されていると同時に、ホストファミリーにとっても多言語を家族で学ぶという日頃の活動の成果を味わう場であり、動機を高める場ともなっていると考えられる。互いに求めるものが噛み合って実現したホームステイである点が、順調に続いてきたひとつの要因とも言える。

4-3. 日本や日本人に対する新しい発見

最後に、日本や日本人に対する新しい発見についての記述を見る。ここでは、留学生の出身国または地域を各項目の後ろに記した。

日本人に対する新たなイメージ
<p><日本人全般に対して></p> <p>イメージが変わった(明るく友達になりやすいことがわかった [中国]、親切でフレンドリーだとわかった [アフリカ]、外で見る日本人とは違って、暖かく陽気だった [ロシア地域]、日本人同士冷たいと思っていたが、それは誤りで平均的な日本人は大変親切で温かいことがわかった [中国]) 日本人が温かい心の持ち主で、思いやりがあることがわかった [中国]、親切でホスピタリティーがあり、面白い [アラブ]、日本人同士親密でかつ他人にもオープン [フィリピン]、文化的で誠実で丁寧 [インド]、忙しい [韓国]、韓国や韓国語に興味を持つ人がたくさんいることがわかった [韓国]、日本の女性は韓国ドラマが好きなこと [韓国]、お酒が好き [フィリピン]</p>
<p><家族に対して></p> <p>家族の仲がよい [韓国、中国]、家族同士敬意と愛情を持って接している [フィリピン、アフリカ]、夫婦が勤勉 [アフリカ]、3人子供がいたこと [中国]、子供が 行儀がよく、従順で勤勉で、かわいく、外国人にも興味をしめしてくれた [フィリピン]、お風呂の入る順番について、以前本を読んで、男性が先、女性が後、年齢順と理解していたが、今は男女平等で、そのことがなくなったことがわかった [ベトナム]、3世代同居なのに和やか [中国]、家族愛を感じた。日本人が家族を重視しないといううわさはみなおすべきだと思った [中国]、子供を真心込めて育てていることに感動した [韓国]。子供に小さいときから簡単な家事を手伝わせていることがわかった [中国]</p>
<p><家庭における主婦に対して></p> <p>日本のお母さんたちの大変さがわかった [中国]、日本の主婦たちはとてもすばらしい人たちだとわかった。彼女たちは生活を楽しんでいる。 [中国]、家庭の主婦は知識欲が旺盛 [中国]、日本の女性が家庭の中で重要な地位を占めていることがとても印象的 [中国]、日本の主婦は時間があり、お金があり、趣味もできる [中国]</p>
日常生活について (生活全般)

本でみたことを確認できて不思議だった [韓国]、自分の国の生活とたいてい同じことに感動した [中国] 自分の国と似ているとわかった [韓国]、飲食の習慣が西欧化していることがわかった [中国、ブラジル]、スムーズで快適な生活であることを知った [バングラデシュ]、家事が自国のやりかたと違うが効率的なことがわかった [ロシア圏]、ペットが好きなこと [中国]、その他

生活文化

お風呂の入り方 [ロシア、ベトナム (みんな一緒のお風呂にはいることが想像できなかった)]。畳の上で布団に寝ることが気持ちがいいことがわかった [韓国]、布団の気持ちよさ [アフリカ] 仏壇を始めて見た [不明] 贈り物を仏壇においたこと [豪]、床に座る気持ちよさ [ペルー] サイズがすべて小さいこと [米]、着物の着方 [韓国] 足だけ暖める電気製品を見たこと [韓国]。

日常生活や生活文化についての記述については、自国の文化や習慣との違いを新鮮にとらえていることを示すものが多かった。来日してから日が浅い留学生にとっては、見るもの聞くものがすべて新鮮に感じられる時期とも重なるのかもしれない。

全体としては日常生活や生活文化に関する記述以上に、日本人について、家族関係について、そして日本の主婦に関しての触れているものが多くあった。肯定的なイメージを述べているものが多い。表に記したこれらの事柄は、それぞれのホストファミリーに固有のもので、一般化してとらえることができないものもあると思われる。しかし、ステレオタイプとは異なる留学生自身の体験にもとづく発見があったことは意義深いと思う。自分の中にあらたな仮説が生まれ、日本での生活の中でそれらを検証していくことになるのではないだろうか。ホストファミリーにとってもこうした留学生との交流は相手を知るだけでなく、自らの文化を再認識する機会ともなっていると思われる。

5. ホームステイプログラムの意義と課題

以上で、見てきたように、このホームステイプログラムは日本での生活体験がまだ浅い留学初期の段階の学生によく利用され、このプログラムに対しては、日本人が営む日常生活を体験すること、日常の生活文化あるいは伝統文化に接すること、観光地などをいっしょに訪問すること、相互の交流などが期待されている

ことがわかった。そして、実際のホームステイでは、このような事柄が具体的な形で実現され、それを楽しむことができたことに加え、ホストファミリーが留学生ひとりひとりに寄せる厚意や関心に触れ、ホストファミリーとの出会いに満足や感謝、喜びを感じる留学生が多いことも明らかになった。また、ホームステイを通じて、これまで日本人や日本に対して抱いていたイメージとは異なる肯定的なイメージを得ている留学生も多くいること、さらに、ホームステイをきっかけに、その後も交流が続くケースも少なくないことがわかった。

日本人の日常生活や日本文化を知ることだけなら、本やテレビや映画などからもたくさんの情報を得ることができる。また、観光地について知りたければガイドブックを読むこともできる。しかし、他の人との相互交流を通じ、自分の体験として、これらに触れることのインパクトは大きい。日本人に対するイメージが代わったというケースも、自らの体験に基づいてこそ生じた変化であると言える。以前行ったチューターアンケートで、チューターが役に立ったことは何かという問いに対する答えで最も多かったのは、学習や生活の手助けになったという項目ではなく、むしろチューターを通して、日本の文化を学んだことというものであった。相互交流の中で日本文化への理解が促進されたことを示すものと言えよう。また、大学の留学生寮に住む学生から、学外で知り合った日本人の家に遊びに行くようになって始めて日本に住んでいるという実感が持てたという話を聞いたこともある。体験や人を通して事柄を理解する過程では、自分の側からの投げかけも可能である。自分の文化や自分自身について知ってもらい、違いや共通点を確認することもできる。ホームステイでは、このように異文化に対する体験的、相互交流的な理解の場が提供されることにひとつの意義があると思う。

また、一方、実際にホームステイに参加した留学生にとっては、こうした体験や相互交流ということばで表現されること以上に、ホストファミリーとの出会いや心的な交流の方がより大きな意味を持つ場合も多いことが留学生からのフィードバックからは読み取れた。同様の報告が鈴木（2000）にも見られる。見ず知らずの家庭に人が飛び来んでいき、また見ず知らずの人を家庭に招き入れるという形は、普通自然に生ずる人と人との出会いとは異なるものである。善意と信頼がなければ成り立たない。通常のプロセスを飛び越えて人の温かい懐に入っているような場を提供しうるのがホームステイのもうひとつの意義と言えるので

はないだろうか。この意味では、日本での滞在の経験が浅い留学初期の学生に限らず、長く日本に滞在している学部留学生や大学院留学生の参加を増やすような広報も試み、彼らからの反応も調査したいと思う。

これまで、このホームステイプログラムは、ごく順調に進めることができた。受け入れ先が一つのまとまった団体で、大学側は基本的にはコーディネーターとのやりとりでプログラムを進めることができたため、年に3回実施し、200人近い留学生を送り出すことができたと感じる。ホストファミリーが受け入れに際し抱くであろう不安に対してもコーディネーターや経験豊かなホストファミリーからの助言等によって受け入れ団体の中で対処してもらっていると思う。個別の対応では、これだけの数の留学生にホームステイを経験してもらうことはできなかったと思う。また、先にも述べたように、受け入れ団体が留学生のために引き受けるというより、留学生に来てもらいたいという気持ちで積極的に迎え入れてくれていること、子供がいる家庭が多く、ホームステイ先でも多様で自然な交流が実現できること、また、日本語が十分でない留学生にも対応してもらえたことなども順調にやってこられた要因となっていると思う。しかし、一方、地域との交流の促進という面から見ると、より広く一般家庭にホームステイ先を求めていく方法を探ることも将来の課題となると思われる。

既に述べたように、ホームステイプログラムのあともホストファミリーとの交流が続く留学生も少なくないようである。交流を継続した留学生がどのくらいいるのか、どのような形で交流が継続されているのか、長く続く交流の中ではどのような展開が見られるのか等、プログラム後の交流について、今後、機会を見て調査を行い、その状況についても分析してみたいと考える。

注

- (1) (財)北海道国際交流センター主催「国際交流のつどい」、地球市民の会主催「小さな地球計画」、JAPAN TENT 開催委員会主催「JAPAN TENT」、(財)カラモジア主催「からいも交流鹿児島・宮崎ホームステイプログラム」等が毎年開催されることを紹介。現在は、こうした学外の行事については、一年間の間に行なわれる主なもののリスト（日本語版、英語版）を

作成し、行事イベント情報として留学生に配付している。

- (2) CDなどを用いて、複数のことば（外国語）を同時に自然の道筋で習得していく活動を行なっている全国規模の民間の団体。JICAの研修生や他大学の留学生のホームステイ受入の実績もある。
- (3) 留学生センターのホームページ、留学生センター内での案内の掲示、行事イベントリスト等で、全学の留学生に向けて広報を行なっている。
- (4) 始めに行なった2回については、著者の担当する日本語のクラスで参加者を募ったが、全学の留学生を対象とした日本語のクラスでもあったので、今回の報告での分析に含めた。
- (5) ホストファミリーとして受け入れを希望してくれる家族が参加希望の留学生数を上回る場合も少なくないようで、調整をしてもらっている。

参考文献

池田聡子・小池澄男 1998 「異文化交流におけるパフォーマンス—イギリスホームステイ体験と日本人学生の自己表現」 東京家政学院大学紀要 38号
167-181

岡益己 2005 「週末型ホームステイの実施とその問題点」 『広島大学留学生教育』 9号、37-53

見城悌治 1997 「千葉大学におけるホームステイ・ホームビジットプログラムの現状と課題」 『千葉大学留学生センター紀要』 3号、71-79

佐々木ひとみ・水野治久 2000 『ホームステイハンドブック ホストファミリーと運営担当者のために』 JAFSA ブックレット1 アルク

鈴木潤吉 2000 「地域の国際交流での学びとは？—赤い川村での留学生ホームステイにおけるホストと留学生の反応から—」 僻地教育研究 55、115-124

ホームステイ当日、留学生センターにてホストファミリーとの対面

